2024年 4月 22日

協伸商会穀物レポート［KKR］Vol. 069
（2023/24年度　USDA米国農務省 4月11日発表）

① 主要穀物の23/24年度作況は南米の収穫終了をもってほぼ確定、全体的に各品目とも安定的収量を確保

23/24穀物年度は北半球が昨秋で終了、また南半球は豪州小麦が終了し南米は大豆が収穫期を迎えほぼ終了に近い。USDA発表では、小麦は前年比インド/米国が増産だが昨年大豊作だった豪州/カナダが減産となり全体では微減。コーンはBRAの減産はあったが米国3.9億㌧/中国2.9億㌧と好調で全体では史上最高見通し。大豆は前年比BRA/米国が若干減少したがARGが倍増の50百万㌧の豊作となり全体では約４億㌧の史上最高見通しとなった。その結果、コメ も含めた期末在庫は8.6億㌧と在庫率約30%を保持し安定。

② 米国の穀物輸出競争力は長期的に低下傾向の中で、ブラジル/ロシア等の輸出数量拡大が顕著

歴史的に米国は世界最大の小麦/コーン/大豆の輸出国であったが、2010年以降ロシア/南米ブラジル/アルゼンチン等の台頭によりその様相は大きく変化。具体的には 今年度の米国穀物輸出見通しは小麦19/コーン53/大豆46⇒合計118百万㌧となり、コーンは辛うじてブラジルと並んでいるが小麦はロシア52百万㌧に水を空けられ５位、大豆はブラジル103百万㌧に突き離され２位、全体ではブラジルが157百万㌧と米国を凌駕している。これに伴い海運穀物物流も米国一極からブラジルを含め多極化してきている。

③ 一方、米国は現在でも世界最大級の穀物生産国の座を維持し 、国内ではバイオ燃料生産に大きく転換しつつある

今年度の米国穀物生産量見通しは、小麦49/コーン390/コメ７/大豆113/その他12⇒合計571百万㌧と中国592百万㌧と並ぶ穀物生産大国である。その中で米国内ではコーン/大豆はバイオ燃料向け消費に向かっており、コーンは生産量の約1/3の1.4億㌧がエタノール生産に利用され、大豆は国内搾油量約13百万㌧(65百万㌧×0.2)のうち約30%(2019年)がバイオデーゼル用に利用されているが、近年航空機ジェット燃料（SAF）用に利用が注目されており、来年度の大豆搾油需要は4.3%増が見込まれている。その中でADM/CGL/全農グレイン等の新たな搾油工場建設の動きが具体化しており、今後大豆油のバイオデーゼル転換が大きく進ものと思われる。

１、世界穀物需給の概要（大豆除く）

① 生産量：	2,808百万㌧	前年比2.1%	増↑	前月比0.1%	減↓
② 消費量：	2,814百万㌧	前年比1.9%	増↑	前月比0.0%	→
③ 貿易量：	508百万㌧	前年比2.7%	増↑	前月比0.0%	→

2、小　麦

① 生産量：	787百万㌧	前年比0.3%	減↓	前月比0.1%	増↑
② 消費量：	800百万㌧	前年比1.1%	増↑	前月比0.1%	増↑
③ 輸出量：	213百万㌧	前年比3.0%	減↓	前月比0.6%	増↑
④ 在庫量：	258百万㌧	前年比4.7%	減↓	前月比0.2%	減↓

／（在庫率 32%） うち中国132百万㌧、占有率51%

⑤ 価　格：　$5.67/Bu　（前年$6.76/Bu　/　前月$5.60/Bu）　と前月比$0.07　上昇。

⑥ 概　況：　生産量は前月より微増/前年より微減で大きく変わらず。消費量はインド等で飼料用需要増から前年比1.1%増の８億㌧の大台。在庫量は消費が生産を上回り前年比5%近く減少したが在庫率は32%と安定。価格は在庫潤沢なことから低位安定。

3、とうもろこし

① 生産量：	1,228百万㌧	前年比6.1%	増↑	前月比0.2%	減↓
② 消費量：	1,212百万㌧	前年比3.9%	増↑	前月比0.0%	→
③ 輸出量：	201百万㌧	前年比11.3%	増↑	前月比0.8%	減↓
④ 在庫量：	318百万㌧	前年比5.3%	増↑	前月比0.4%	減↓

／（在庫率 26%） うち中国212百万㌧、占有率67%

⑤ 価　格：　$4.34/Bu　（前年$6.44/Bu　/　前月$4.12/Bu）　と前月比$0.22　上昇。

⑥ 概　況：　生産量はアルゼンチンの単収減により前月比微減したが前年比では米国の大幅生産増により12億㌧を超え史上最高見通し変わらず。消費量も順調に伸び12億㌧台。ただ生産量増加が消費量を上回り期末在庫量３億㌧を大きく上回る見込み。 在庫率は安定レベルの26.3%と前年比0.4%増。価格はこの様な状況から４㌦台前半を低迷している。

4，大　豆

① 生産量：	397百万㌧	前年比4.9%	増↑	前月比0.0%	→
② 消費量：	381百万㌧	前年比4.2%	増↑	前月比0.2%	減↓
③ 輸出量：	173百万㌧	前年比0.6%	増↑	前月比0.3%	減↓
④ 在庫量：	114百万㌧	前年比12.7%	増↑	前月比0.0%	→

／（在庫率 30%） うちBRA33/ARG26百万㌧

⑤ 価　格：　$11.85/Bu　（前年$14.93/Bu　/　前月$11.43/Bu）　と前月比$0.42　上昇。

⑥ 概　況：　生産量/消費量とも前月見通しからほとんど変わらず、どちらも史上最高見通しで４億㌧に迫っている。ただ期末在庫は生産量が前年比11%増と大きく１億㌧を超える見通し。価格は中国からの引き合いも強く何とか11㌦台を維持している。

以上

世界の穀物・大豆等の需給

2024年4月11日
米国農務省発表：　単位１００万トン

主要穀物世界の需給							
			生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量
全穀物	2021/22		2,794	3,589	513	2,795	794
	2022/23		2,750	3,544	494	2,763	781
	2023/24	3月	2,809	3,589	508	2,814	775
	2023/24	4月	2,808	3,589	508	2,814	775
小麦	2021/22		780	1,064	203	791	273
	2022/23		789	1,062	220	791	271
	2023/24	3月	787	1,058	212	799	259
	2023/24	4月	787	1,058	213	800	258
粗粒穀物（とうもろこし等）　注１	2021/22		1,501	1,824	254	1,486	339
	2022/23		1,446	1,785	220	1,452	332
	2023/24	3月	1,507	1,839	243	1,493	346
	2023/24	4月	1,505	1,837	241	1,493	345
米	2021/22		513	701	57	518	183
	2022/23		514	698	54	520	178
	2023/24	3月	515	693	53	523	170
	2023/24	4月	516	694	53	521	172
大豆	2021/22		360	459	154	366	93
	2022/23		378	471	172	370	101
	2023/24	3月	397	499	174	382	117
	2023/24	4月	397	498	173	381	117

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	3月	301.62	1,230.24	189.48	1,212.24	202.27	319.63
	4月	302.19	1,227.86	187.47	1,211.77	200.59	318.28
アメリカ	3月	34.55	389.69	0.64	316.37	53.34	55.17
	4月	34.55	389.69	0.64	317.64	53.34	53.90
アルゼンチン	3月	1.11	56.00	0.02	14.10	42.00	1.03
	4月	1.17	55.00	0.02	13.10	42.00	1.09
ブラジル	3月	11.47	124.00	1.20	78.50	52.00	6.17
	4月	11.54	124.00	1.20	78.50	52.00	6.24
EU	3月	7.23	60.10	22.00	77.90	4.20	7.23
	4月	7.31	61.00	21.00	77.90	4.20	7.21
日本	3月	1.30	0.01	15.50	15.50	0.00	1.31
	4月	1.30	0.01	15.50	15.50	0.00	1.31
中国	3月	206.04	288.84	23.00	306.00	0.02	211.86
	4月	206.04	288.84	23.00	306.00	0.02	211.86
ロシア	3月	0.91	16.60	0.05	11.20	5.30	1.06
	4月	0.91	16.60	0.05	11.00	5.60	0.96
ウクライナ	3月	2.80	29.50	0.02	5.00	24.50	2.82
	4月	2.80	29.50	0.02	5.00	24.50	2.82

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	3月	102.15	396.85	170.78	381.90	173.61	114.27
	4月	101.31	396.73	170.33	381.08	173.06	114.22
アメリカ	3月	7.19	113.34	0.82	65.97	46.81	8.57
	4月	7.19	113.34	0.68	65.69	46.27	9.26
アルゼンチン	3月	17.21	50.00	6.10	42.75	4.60	25.96
	4月	17.21	50.00	6.10	42.75	4.60	25.96
ブラジル	3月	37.35	155.00	0.45	56.75	103.00	33.05
	4月	37.35	155.00	0.45	56.75	103.00	33.05
中国	3月	32.34	20.84	105.00	120.50	0.10	37.58
	4月	32.34	20.84	105.00	120.50	0.10	37.58
EU	3月	1.26	3.06	13.80	16.49	0.30	1.33
	4月	1.10	2.98	14.30	16.62	0.30	1.46

世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	3月	271.10	786.70	211.21	798.98	212.13	258.83
	4月	271.00	787.36	212.34	800.10	213.47	258.27
アメリカ	3月	15.50	49.31	3.95	31.14	19.32	18.30
	4月	15.50	49.31	3.81	30.32	19.32	18.98
アルゼンチン	3月	4.07	15.90	0.05	6.70	10.50	2.82
	4月	4.07	15.90	0.05	6.70	10.00	3.32
オーストラリア	3月	4.37	26.00	0.20	7.00	20.00	3.57
	4月	4.37	26.00	0.20	7.00	20.50	3.07
カナダ	3月	3.51	31.95	0.60	8.70	24.00	3.37
	4月	3.51	31.95	0.60	8.70	24.00	3.37
EU	3月	16.52	133.65	13.00	111.50	36.50	15.17
	4月	16.04	134.15	13.50	112.50	34.50	16.69
中国	3月	138.82	136.59	11.00	153.50	0.90	132.01
	4月	138.82	136.59	11.00	153.50	0.90	132.01
インド	3月	9.50	110.55	0.25	111.00	0.30	9.00
	4月	9.50	110.55	0.12	112.97	0.30	6.90
ロシア	3月	14.64	91.50	0.30	43.00	51.00	12.44
	4月	14.64	91.50	0.30	42.00	52.00	12.44
ウクライナ	3月	3.50	23.40	0.08	7.70	16.00	3.28
	4月	2.90	23.40	0.08	7.30	17.50	1.58

脚注１：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約８０％がとうもろこしである。
脚注２：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：９月～8月。

世界主要国の農業と穀物需給の行方…ロシア(7)

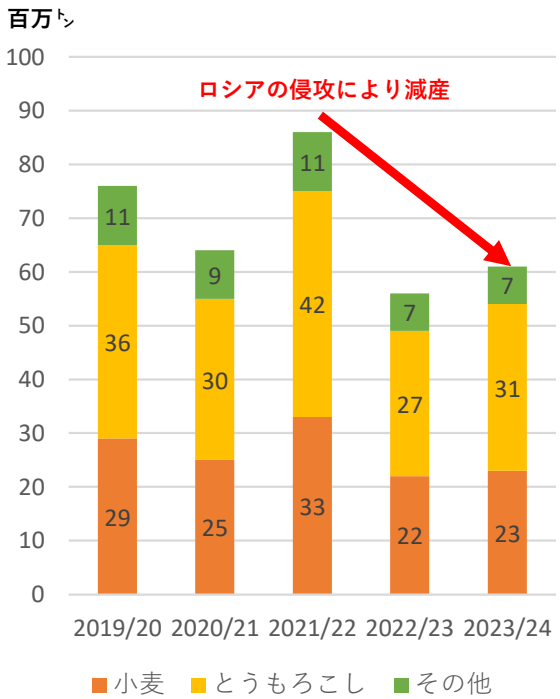
❶ この間、ロシアの農業とりわけソ連邦崩壊(1991年)前後からの小麦を中心とした穀物生産/輸出動向及び/穀倉地帯/サプライチェーン/輸出施設等について6回に渡り特集し、2000年前後のロシア農業崩壊状態から2015年以降の世界有数の小麦生産/輸出国に躍り出た経過/背景等について述べてきたが、今回はロシアに隣接し伝統的に「ヨーロッパのパン籠」と称されロシアに連なる豊饒な黒土地帯(チェルノーゼム)を有するウクライナ農業について述べて、このロシア特集を終えたい。

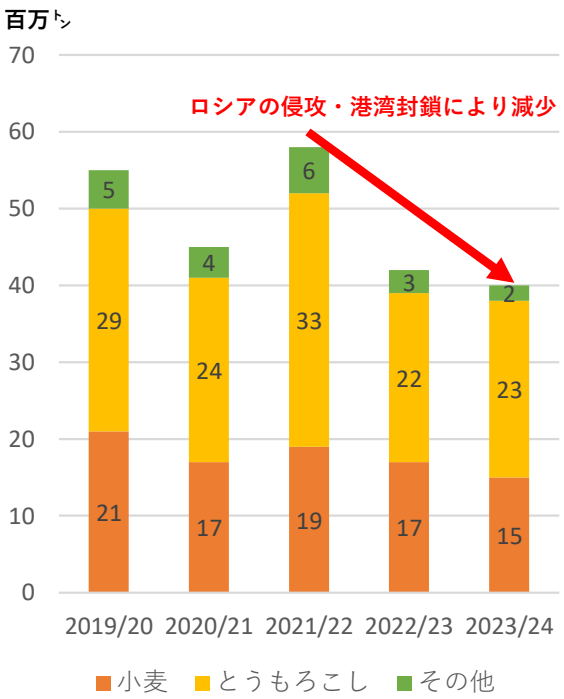
❷ ウクライナは周知の通り22年2月のロシア侵攻によって国土の一部(東部4州)を略奪され農業生産も大きなダメージを受け現在に至っている。同国の穀物生産はソ連邦崩壊前47百万ﾄﾝ前後と安定していたが、崩壊後はほぼロシア農業と同様に衰退の一途を辿り2000年前後には2千万ﾄﾝ前後まで激減。その後、農業生産組織の改革(大規模農業企業=オルガリヒの創出等)、大型機械導入、肥料農薬の使用拡大等の近代化によりロシア侵攻前の21/22年度には[表1]の通り穀物生産86百万ﾄﾝ(小麦33/コーン42)、輸出58百万ﾄﾝ(小麦19/コーン33)まで拡大し、世界有数の穀物生産/輸出国としての地位を確立し、小麦は中東/アフリカ諸国、コーンは中国を中心に輸出数量を拡大してきた。

❸ しかしながら、22年2月のロシア侵攻により状況は暗転。[表1]の通り翌22/23年度は生産56(▼35%)百万ﾄﾝ/輸出42(▼28%)百万ﾄﾝと急減した。このロシア侵攻によるウクライナの農業セクターに於ける被害状況は甚大で、世銀調査(23年6月)によればその損失額は ① 農業機械関係46.5億ﾄﾞﾙ ② 農業施設関連13.3億ﾄﾞﾙ ③ 農作物被害18.7億ﾄﾞﾙ、その他含めて100億ﾄﾞﾙ(約1.5兆円)にのぼると推計されているがその額はその後も拡大している。また、深刻なのは ④ 紛争地に残された弾丸/燃料などに含まれる水銀/ヒ素などによる土壌汚染の深刻化と地雷埋設や花びら地雷等によりウクライナ農地の1/4にあたる1,050万haが耕作不能と推定され ⑤ 同時に、徴兵による農業労働力人口の減少や肥料/農薬等の生産資材不足/高騰も深刻である。地域別にみると[図1]に示した様に小麦の主要生産地帯はロシアに侵略された東部4州(特にザポリージャ/ヘルソン)で全生産量の21%を占め、減産は長期化する可能性が高い。一方、コーンはキーウを中心にした北中部に展開している為影響は比較的小さいものとみられる。

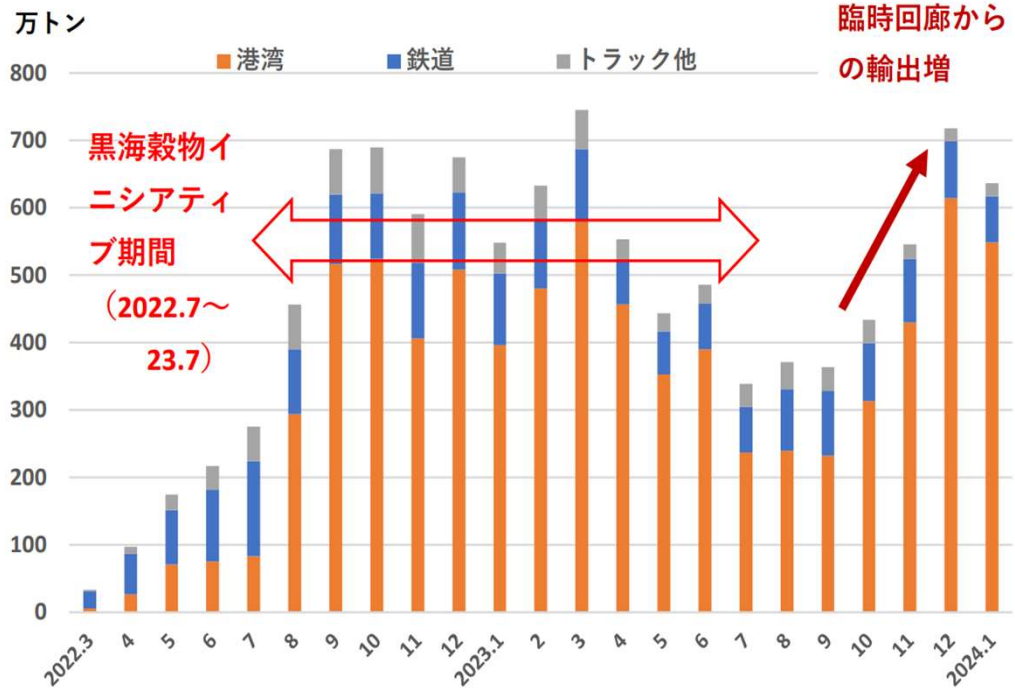
❹「黒海穀物回廊」は、ロシア侵攻後の22年7月国連/トルコも含めた4者合意されたが昨年7月ロシアが離脱、この1年間の黒海回廊経由の輸出量は[表2]の通り約3,280万ﾄﾝ(小麦890/コーン1,690/その他)、全体では陸路含め月間450-700万ﾄﾝとなり輸出は一定量確保された。しかし、ロシア離脱以降黒海経由は250万ﾄﾝ程度まで激減した為ウクライナは8月[図1]に示した黒海ルーマニア沿岸を通る新ルート「臨時回廊」をIMO(国際海事機関)に通報し運用を開始した。その結果、7-9月は平均300万ﾄﾝ程度まで落ちた数量が12月には700万ﾄﾝレベルまで大幅に改善された。また、USDAの23/24年度UKR輸出数量見込みも前月から上方修正され43百万ﾄﾝ(小麦16/コーン25)、生産量は60百万ﾄﾝ(小麦23/コーン30)と徐々に回復している。しかし、ロシア侵攻によるUKRの傷跡は深く、侵攻前レベルまで戻るのはかなりの資金/労力/時間がかかるのは避けられず、世界穀物需給への影響を注目する必要がある。(完)

【表1】小麦ととうもろこしの年度別生産量(左)・輸出量(右)の推移(年度)





【表2】ロシア侵攻以降の月別 ウクライナの穀物・油糧種子輸出



【図1】従来の黒海イニシアティブ回廊と臨時穀物回廊